

精神看護学実習前の看護学生の 精神を病む人に対するイメージ — 社会的スキルおよび信頼感との関係 —

To Analyze Nursing Students' Perception Regarding People with Mental Illnesses before Psychiatric Nursing Training — The Relationship between Social Skills and Trust —

柴 裕子・瀧井ヒロミ
Yuko Shiba and Hiromi Takii

要 旨

精神を病む人に対する否定的イメージは、安心して相手に近づくことを妨げる可能性がある。本研究では、精神看護学実習前の学生の精神を病む人に対するイメージを検討し、どのようなイメージが社会的スキルや信頼感と関連があるかについて明らかにし、実習指導の示唆を得ることを目的とした。方法は、看護学部3年生で本研究に同意を得られた66名に対し、無記名自記式質問紙調査を行った。その結果、精神看護学実習前の学生は、精神を病む人に対し、「暗い」「親しみにくい」「危険な」など否定的イメージであった。イメージのいくつかの項目は、社会的スキルの下位尺度である「問題解決能力」「他者への気遣い」「打ち解ける」と関連があったが信頼感とは関連がなかった。実習前の学生は、精神を病む人の苦痛や弱さを捉えた場合、問題を解決し相手を気遣い、そして相手と打ち解けるスキルを駆使して、対人関係を築こうとする傾向であると考えられる。

キーワード(Key words)：精神看護 (Psychiatric Nursing), 看護学生 (Nursing Students), 社会的スキル (Social Skill), 信頼感 (Trust)

はじめに

看護学実習は、学内で習得した看護に必要な専門的知識・技術・態度を、実際に生活している患者に対して適用し、看護を実践する場である。精神看護学実習（以下、実習）において看護学生（以下、学生）は、臨地で精神を病む人に出会い、実際に接しながら、新たな体験を通して看護の実際を学ぶことになる。しかし、日常生活の中で、精神を病む人に接する機会は少なく、実習で初めて接することになるのが現状である。そのため、実習

前の精神を病む人に対するイメージは、授業での影響も受けながら、学生個々にさまざまなイメージをもっているものと思われる。精神を病む人をケアする際に、対象に先入観や思い込みなどがあると、対象の問題状況を把握することができず、対象への効果的なケアへと導くことが困難となる。学生が、精神を病む人をどのように捉える傾向があるのか、把握していくことが求められる。

学生の、実習における精神を病む人に対するイメージは、否定的イメージを持つことが

多い¹⁾。前報²⁾では、精神看護学学習前（以下、学習前）の学生に、精神を病む人に対するイメージを調査したところ、精神を病む人というステレオタイプを受けいれている状況であるために精神を病む人に対して、否定的イメージの傾向であった。学生は、講義や演習で対象を理解する方法を学ぶことになるが、実際に精神看護を経験してはいないため、学生のもつ否定的イメージはそれほど軽減しないのではないかと思われる。さらに実習前の学生の精神を病む人に対する否定的イメージは、精神を病む人に対する感情の持ち方や関わり方に影響するのではないかと考えた。

このようなイメージを持ちながらも、実習においては、精神を病む人と上手く関わられるような対人関係を築き、相手に近づくスキルが求められる。このスキルとは、対人関係を円滑にはこぶことを指しており、菊池ら³⁾による社会的スキル（Kikuchi's Social Skill Scale：KiSS-18）などが開発されている。また、この尺度の有用性は、藤野ら⁴⁾の研究で「対人関係における苦手意識や実習での困難な対人関係が社会的スキルにおいて負の影響要因であった」という報告などがあり、看護教育研究において関心もたれている。このように精神を病む人に対するイメージ、社会的スキルのそれぞれを扱った研究は散見されるが、精神を病む人に対するイメージと社会的スキルの関係を分析した報告は少ない。

さらに、社会的スキルと同様に必要な要素として信頼感があげられる。信頼感とは、肯定的側面である「自分への信頼」と「他人への信頼」、否定的側面である「不信」で構成されている⁵⁾。信頼感の中の「自分への信頼」・「他人への信頼」が高いほど社会的スキルが高いことは、明らかにされている²⁾。精神看護

では、看護の対象が対人関係を築くことを不得意とする場合が多いと考えられる。天貝⁶⁾は、他者と自分に関わる感情を肯定的に結び付ける役割を果たす概念として信頼感をあげており、学生が他者と関わる際の他者と自分に関わる準備状況を捉えるために有用であると考えられる。しかし、実習との関連において信頼感を扱ったものは少ない。

学生の精神を病む人に対する否定的イメージは、実習の苦手意識や実習困難な対人関係へ影響すると考えられる。実習において精神を病む人との円滑な関係を築くためには、学生の抱きやすい否定的イメージを把握し、学生の社会的スキルや信頼感の程度を見極めることが重要と思われる。この研究により、学生が精神を病む人に対してどのようなイメージをもち、また、学生のもつ社会的スキルや信頼感とは、どのようなイメージと関係があるのかがわかり、実習指導に役立てることができると考える。

I. 研究目的

1. 学生の実習前の、精神を病む人に対するイメージを明らかにする。
2. 学生の実習前の社会的スキルを検討し、精神を病む人に対するイメージとの関係を明らかにする。
3. 学生の実習前の信頼感を検討し、精神を病む人に対するイメージとの関係を明らかにする。

II. 用語の定義

1. 精神を病む人に対するイメージ：広辞苑によると、イメージとは「①心の中に思い浮かべる像。全体的な印象。②姿。形象。映像。」である。本研究では、学生

が心の中に思い浮かべる精神を病む人に対する印象とする。

2. 社会的スキル：菊池⁷⁾の定義である「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル」とする。
3. 信頼感：天貝⁵⁾の定義である「人や自分自身を安心して信じ、頼ることができるという気持ち」とする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

調査研究

2. 研究対象者

A大学看護学部3年生で、本研究に同意を得られた66名

3. 調査期間

2012年8月(精神看護学実習前)

4. 調査内容

- 1) 属性は性別，年齢，精神を病む人との接触体験に関する内容であり，個人を特定しない。
- 2) 精神を病む人に対するイメージは，浅井⁸⁾の「精神障害者に対するステレオタイプ」を使用する。項目は，「明るいー暗い」「活発なー不活発な」「親しみやすいー親しみにくい」など形容詞対25項目である。「4点：どちらともいえない」を中間とし，選択肢は7段階である。
- 3) 社会的スキル18項目 (Kikuchi's Social Skill Scale : KiSS-18) は，菊池⁹⁾が開発した尺度であり，信頼性，妥当性は検証されている。選択肢は，5段階であり，得点が高いほど対人関係技能が高いことを示す。
- 4) 信頼感 (24項目) は，天貝⁵⁾が開発した尺度であり，信頼性，妥当性は検証され

ている。下位尺度は，「自分への信頼」，「他人への信頼」，「不信」の3つである。「自分への信頼」は，“私は，自分自身をある程度は信頼できる”“私は，自分自身の行動をある程度はコントロールすることはできるという確信を持っている”など6項目で構成されている。「他人への信頼」は，“これまでに出会ったほとんどの人は私によくしてくれた”“これまでの経験から，他人もある程度は信頼できると感じる”など8項目で構成されている。「不信」は，“所詮，まわりは敵ばかりだと感じる”“私はなぜか人に対して疑り深くなってしまう”など10項目で構成されている。選択肢は6段階であり，「自分への信頼」と「他人への信頼」は得点が高いほど信頼感が強いことを示し，「不信」は得点が高いほど不信が強いことを示す。

5. 調査方法

調査日時は，対象者に負担のかけない時間とし，研究依頼の案内を行う。研究依頼の説明を受けることに自由意思で参加した対象者に対し，無記名自記式質問紙調査を行った。

6. 分析方法

- 1) 精神を病む人に対するイメージは，否定的イメージが高いほど点数が高くなるように逆転項目の処理を行い，各項目の平均を算出する。
- 2) 社会的スキルの合計得点の平均を算出する。また，この尺度は，調査対象によっていくらか因子構造が違ったものになっており，本研究においても因子構造の検討を行い，各下位尺度平均を算出する。さらに社会的スキルの下位尺度と精神を

病む人に対するイメージの各項目との関連について分析する。

- 3) 信頼感は、天貝の採点方法にしたがって「自分への信頼」、「他人への信頼」、「不信」の3つの各下位尺度平均を算出し、精神を病む人に対するイメージの各項目との関連について分析する。
- 4) 2), 3)の各変数間の関連は、Pearsonの積率相関係数を用いて算出し、有意水準は両側5%とした。統計解析はすべてIBM SPSS Statistics 19で行った。

IV. 倫理的配慮

研究は、中京学院大学研究倫理審査会の承認を得て開始した。対象者には、書面により研究目的、研究方法、調査期間、研究参加の自由、研究中・終了後の対応について説明した。個人情報保護の方法は、研究のデータ・結果は研究の目的以外に用いることはしないこと、質問紙は鍵のかかる場所で保管し、データは研究者しか開けないパスワードにて保管することを説明した。特に、研究への参加は自由であり成績には関係しないこと、調査票の記入をもって同意を得たとするを説明した。

V. 講義と実習の概要

A大学の精神看護学の授業は、2年生の後期に精神看護学概論(2単位30時間)で精神看護に関する基礎的知識を学び、3年生の前期に精神看護を実践するための知識と技術を習得するため精神看護援助論(2単位60時間)が行われている。実習は3年生の後期に2週間、原則一人の患者を受け持ち、看護を实践する予定である。

VI. 結果

1. 対象者の概要

研究対象者66名に調査を依頼し、50名から回収できた(回収率75.75%)。一部の尺度に欠損値があるものは、欠損値のある変数の組み合わせだけを省いて分析した。対象者の平均年齢は21.1(SD 2.73)歳であり、女子44名、男子6名であった。今までに精神を病む人と会ったことがある学生は18名(36.0%)、会ったことがない学生は32名(64.0%)であった。

2. 実習前の精神を病む人に対するイメージの検討(表1)

精神を病む人に対するイメージは、「明るい-暗い」、「親しみやすい-親しみにくい」、「安全な-危険な」の順に否定的イメージが高く、中間の値4点を上回る項目が25項目中23項目であった。

表1 精神を病む人に対するイメージ 各項目の平均値

項目	平均値	標準偏差
明るい - 暗い	5.18	1.32
親しみやすい - 親しみにくい	5.16	1.23
安全な - 危険な	5.06	0.91
開放的な - 閉鎖的な	5.04	1.23
健康的な - 病的な	4.98	1.02
強い - 弱い	4.96	1.34
活発な - 不活発な	4.94	1.15
幸福な - 不幸な	4.76	0.92
平和的な - 暴力的な	4.70	0.74
希望的な - 絶望的な	4.68	1.06
穏やかな - 荒い	4.54	0.99
暖かい - 冷たい	4.46	0.91
清潔な - 不潔な	4.38	0.92
優しい - 恐ろしい	4.34	0.94
快い - 気持ちの悪い	4.32	0.71
美しい - 醜い	4.30	0.74
意志の強い - 意志の弱い	4.28	1.21
親切的な - 不親切的な	4.26	0.99
好きな - 嫌いな	4.24	0.62
素直な - 強情な	4.22	1.02
自由な - 不自由な	4.20	1.07
誇らしい - 恥ずかしい	4.14	0.88
かわいらしい - にくらしい	4.04	0.49
正直な - 不正直な	3.80	1.07
気の毒な - いいきみな	3.38	1.05

3. 実習前の社会的スキルと精神を病む人に対するイメージの関係

1) 実習前の社会的スキルの検討

実習前の社会的スキルの合計得点の平均は、56.54(SD 9.73)、男子は64.17(SD 7.88)、女子は55.5(SD 9.56)であった。次に主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、4因子が抽出され累積寄与率は55.91%であった。第1因子は“仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか”などの8項目で構成され、「問題解決能力」因子と命名した。第2因子は“他人を助けることを上手にやれますか”など3項目で構成され、「他者への気遣い」因子と命名した。第3因子は“知らない人とでもすぐに会話が始められますか”など5項目で構成され、「打ち解ける」因子と命名した。第4因子は“まわりの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっていけますか”など2項目で構成され、「否定的感情の処理」因子と命名した。

社会的スキルの4つの下位尺度の各平均値は、「問題解決能力」が3.06(SD .67)、「他者への気遣い」が3.18(SD .73)、「打ち解ける」が3.07(SD .73)、「否定的感情の処理」が3.60(SD .72)であった。各因子のCronbach's α 係数は、「問題解決能力」(.85)、「他者への気遣い」(.84)、「打ち解ける」(.83)、「否定的感情の処理」(.56)、であり、「問題解決能力」、「他者への気遣い」、「打ち解ける」の下位尺度は互いに正の相関を示した。

2) 実習前の社会的スキルと精神を病む人に対するイメージの関係 (表2)

社会的スキルの「問題解決能力」は、精神を病む人に対するイメージの「幸福な－不幸な($r=.33$)」、「美しい－醜い ($r=.37$)」で正の相関があった。社会的スキルの「他者への

気遣い」は、精神を病む人に対するイメージの「幸福な－不幸な($r=.30$)」、「清潔な－不潔な($r=.32$)」、「意志の強い－意志の弱い($r=.38$)」、「好きな－嫌いな ($r=.30$)」で正の相関があった。また、社会的スキルの「打ち解ける」と精神を病む人に対するイメージの「美しい－醜い($r=.30$)」で正の相関があった。

表2 精神を病む人に対するイメージと社会的スキルの下位尺度との相関

		<社会的スキル下位尺度>			
		問題解決能力	他者への気遣い	打ち解ける	否定的感情の処理
<精神を病む人に対するイメージ>					
幸福な	-不幸な	.33 *	.30 *	.12	.02
清潔な	-不潔な	.14	.32 *	-.08	-.06
美しい	-醜い	.37 *	.27	.30 *	.23
意志の強い	-意志の弱い	.20	.38 *	.10	.00
好きな	-嫌いな	.12	.30 *	.11	-.05

* $p < .05$

4. 実習前の信頼感と精神を病む人に対するイメージの関係

1) 実習前の信頼感の検討

信頼性尺度の3つの下位尺度の各平均値は、「自分への信頼」が3.92 (SD.77)、「他人への信頼」が4.18(SD.79)、「不信」が3.58(SD.75)であった。各因子のCronbach's α 係数は、「自分への信頼」(.85)、「他人への信頼」(.90)、「不信」(.90)であった。

2) 実習前の信頼感と精神を病む人に対するイメージの関係

信頼感の下位尺度と精神を病む人のイメージの項目では、有意な相関は無かった。

VII. 考察

本研究では、実習前の学生が精神を病む人に対してどのようなイメージを持ち、さらに学生の持つ社会的スキルや信頼感は、どのようなイメージと関係があるかについて検討した。

1) 実習前の精神を病む人に対するイメージ

学生の実習前の、精神を病む人に対するイ

イメージは、25項目中23項目で否定的イメージであった。否定的イメージの平均値が4.9以上と高かった項目は、「明るいー暗い」「親しみやすいー親しみにくい」などの近づき難さや、「安全なー危険な」「開放的なー閉鎖的な」「健康的なー病的な」などの危険な感じ、また「強いー弱い」「活発なー不活発な」など弱さを感じている項目であった。中島ら¹⁰⁾は、「講義によって、精神障がいをもつ人は安全で、怖くないというイメージへと変化した」と、精神を病む人に対する危険性や恐ろしさは、講義によって軽減がはかれることが報告されている。本研究では、危険性や恐ろしさに関する項目は否定側への得点が高く、中島らとは異なる結果であった。このことは、6割の学生が今までに精神を病む人と会ったことがなく、会ったことがある学生についても、経験の回数やその程度がさまざまであると考えられること、また、実習前には、講義で精神を病む人に対する捉え方について学んでも危険性や恐ろしさは容易には軽減しないことが考えられた。

2) 実習前の社会的スキルと精神を病む人に対するイメージの関係

実習前の学生の社会的スキルは、「問題解決能力」、「他者への気遣い」、「打ち解ける」、「否定的感情の処理」の4因子構造であった。「他者への気遣い」に含まれる項目は、「他人を助けることを上手にやれますか」「相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか」などである。実習前の学生の社会的スキルで、「他者への気遣い」因子が抽出されたのは、これまでに精神看護学の講義を終了したことや、他領域の講義や実習などの体験から、他人にうまく指示をしたり、他人を助けたりというような他者への気遣いも重視す

ることにつながったと考えられる。

精神を病む人に対するイメージで社会的スキルと関連のあった項目はすべて否定側(平均値4.2~4.8)であり、「不幸な」、「不潔な」、「醜い」、「意志の弱い」、「嫌いな」の5項目であった。精神を病む人に対して、「不幸な」、「醜い」イメージを持つ学生は、「問題解決能力」と関連がみられ、どこに問題があるのかをみつけることや、相手から非難されたときに上手く片づけることができるという傾向であった。また、「不幸な」、「不潔な」、「意志の弱い」、「嫌いな」イメージを持つ学生は、「他者への気遣い」と関連がみられ、他人を助けることや相手が怒っているときに上手くなだめることができる傾向であった。「醜い」イメージを持つ学生は、「打ち解ける」と関連があり、他人とすぐに会話が始められることなどが得意な傾向であった。

「不幸な」、「不潔な」、「醜い」、「意志の弱い」イメージは、危険性や恐ろしさとは反対に、精神を病む人の苦痛や弱さを捉えており、学生が精神を病む人に対して何かをしてあげたいと考えていることが推察される。川村ら¹¹⁾は、「学生が患者の言動を依存的だと捉えているとき、患者の実体面の事実に着目させると、患者の実体と認識と行動のつながりが理解でき、他者に依頼せざるを得ない患者の思いを感じ取りやすくなる。」と述べている。本研究の学生は、精神を病む人の苦痛や弱さを捉えた場合、問題を解決し、相手を気遣い、相手と打ち解けるスキルを使って対人関係を築こうとする傾向が、実習前の段階で定着していると考えられる。また、「嫌いな」イメージが「他者への気遣い」と関連がみられたことは、学生が精神を病む人に対して否定的な感情をもっていることを意識して

も、相手を気遣おうとする傾向であると考えられる。武井¹²⁾は、スーパーナースになろうとすればするほど陥りやすい勘違いの一つとして、「患者に対して看護師は感情的になってはならないと思う、まして看護師が患者を嫌うことがあってはならないと思うこと」をあげている。このように学生が精神を病む人と関わる場面で、自分の否定的感情を抑えて関わろうとしている場合もあることが推察される。

3) 実習前の信頼感と精神を病む人に対するイメージの関係

精神看護学実習前の学生の信頼感は、「4点：少しあてはまる」を基準として考えると、肯定的側面である「自分への信頼」はやや低く、「他人への信頼」はやや高い結果であった。また否定的側面である「不信」は、やや低い結果であった。坂田¹³⁾は、精神を病む人に対する恐ろしさは、「患者に対する恐ろしさばかりではなく、自分の一言が患者を傷つけてしまったり、病状を悪化させるのではないかという自分自身に対する自信のなさでも」と述べており、相手に対する信頼だけではなく、自分に対する不安な感情を捉えることも必要である。今回の結果では、信頼感と精神を病む人に対するイメージは関連がみられなかった。それは、実習での他者との関わりを想像して、自分がどんな気持ちになるのかという捉え方ではなく、学生のこれまでの他者との信頼に関わる経験や知識が土台となった上での結果であること、また、「精神を病む人」という対象が特に、この時点での学生の持つ信頼感を左右するものではないことが考えられた。

VIII. 結論

本研究において以下のことが明らかとなった。

1. 実習前の学生は、精神看護に関する講義や演習で対象を理解する方法は学んでいても、実際に精神看護を経験していないため、精神を病む人に対して否定的イメージであった。
2. 実習前の学生は、精神を病む人の苦痛や弱さを捉えた場合、問題を解決し相手を気遣い、そして相手と打ち解けるスキルを駆使して、対人関係を築こうとする傾向であると考えられる。
3. 実習前の学生の信頼感と、精神を病む人に対するイメージとの関連はなかった。

IX. 研究の限界と今後の課題

本研究の結果から、実習前の学生は、精神を病む人に対する危険性のイメージは払拭されず、弱さのイメージに対しては、社会的スキルがプラスの方向に働くことが明らかとなった。学生が実習前にもつ精神を病む人に対するイメージは、学内での講義をはじめ精神を病む人との今までのかかわりの有無や、その程度により異なっていると考えられる。本研究では、精神を病む人との実際のかかわりの程度によるイメージの検討は行っていないため、今後の検討が必要である。

また、否定的なイメージの中には、「危険性」、「近づき難さ」、「弱さ」などさまざまな捉え方があった。今回は、イメージの定義を「学生が心の中に思い浮かべる精神を病む人に対する印象」とした。しかし、それぞれの学生が実習でかかわる精神を病む人の病状やかかわりの内容によって、イメージはさらに広がる可能性がある。今後、「イメージ」をどのように定義するのがよいか検討したいと考える。

おわりに

本研究では、実習前の学生の精神を病む人に対するイメージと、社会的スキルや信頼感との関係について明らかにした。学生は、精神を病む人に対して否定的イメージを持ちながらも、精神看護学や他領域の学習体験も含め獲得した社会的スキルを駆使し、今後の実習に臨むことになる。臨地実習では、学生がこのような状況にあることを踏まえ指導に活かしたい。

謝辞

本研究を実施するにあたり、ご協力くださいました学生の皆様に、心より感謝申し上げます。尚、本研究は平成23年度中京学院大学看護学部共同研究費を得て行いました。

引用文献

- 1) 斎藤秀光, 光永憲香, 齋二美子: 看護学生における精神障害者のイメージの変化について, 東北大医保健学科紀要, 16(2), 105-113, 2007.
- 2) 柴 裕子, 瀧井ヒロミ: 看護学生の精神を病む人に対するイメージ, 社会的スキルおよび信頼感—精神看護学学習前—, 日本精神科看護学術集会誌, 55(2), 326-330, 2012.
- 3) 菊池章夫: また／思いやりを科学する, 川島書店, 197, 1998.
- 4) 藤野ユリ子, 室屋和子, 佐藤一美: 看護系大学四年生の学生生活や対人関係に関する認識と社会的スキル, 産業医科大学雑誌, 27(3), 263-272, 2005.
- 5) 天貝由美子: 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響, 教育心理学研究, 43, 364-371, 1996.
- 6) 天貝由美子: 成人期から老年期に渡る信頼感の発達—家族および友人からのサポート感の影響, 教育心理学研究, 45(1), 79-86, 1997.
- 7) 前掲3), 185.
- 8) 浅井暢子: 精神障害者に対する意識と受容, 日本社会心理学会第40回大会発表論文集, 234-235, 1999.
- 9) 菊池章夫: KiSS-18の12年, 日本性格心理学会第8回大会発表論文集, 26-27, 1999.
- 10) 中島充代, 梅津郁美: 看護学生の精神障がい者に対するイメージと社会的距離の変化—精神科経験と講義・実習の影響—, 大阪信愛女学院短期大学紀要, 44, 13-18, 2010.
- 11) 川村道子, 小笠原広実, 阿部恵子: 精神看護学実習における学生の認識の発展を促す指導に関する研究, 宮崎県立看護大学研究紀要, 7(1), 32-44, 2007.
- 12) 武井麻子: 精神看護学ノート第2版, 医学書院, 171, 2005.
- 13) 坂田三允: 精神科看護教育の特性と学生の意識—実習で変わる学生の意識, 看護教育, 30, 526-530, 1989.